

卓話集

平成 20 年 1 月 16 日

担当：松野 秀計

「大陸横断世界旅行」パート 3



旅行期間 1988 年 7 月 6 日 ~ 1988 年 12 月 20 日 (168 日間)

・渡航国 パート 1

中国、モンゴル(トランジット)、ロシア(旧ソ連)、ウクライナ(旧ソ連)
(トランジット)、ハンガリー、チェコ(旧チェコスロバキア)、オーストリア
イタリア、バチカンシティー、ギリシャ、セルビアモンテネグロ(旧ユーゴスラビア)

パート 2

ボスニアヘルツェゴビナ(旧ユーゴスラビア)、クロアチア(旧ユーゴスラビア)
スロベニア(旧ユーゴスラビア)リヒテンシュタイン、スイス、ドイツ、オランダ、
ベルギー、ルクセンブルグ

パート 3

ドイツ、フランス、スペイン、ポルトガル、イギリス、モロッコ、トルコ、イラン
シリア、エジプト

計 当時 26 カ国、現在 30 カ国

89 日目：10 月に入りアルプス以北のヨーロッパは早々と秋が終わろうとしている。

これから旅行者にとって、辛い冬がやって来る。何が辛いか、列記してみた。

1. 日が暮れるのが早い。16 時ごろには真っ暗になってしまう為、移動時間が極端に少なくなってしまう。日が暮れてから新しい町に到着するのは、非常に辛い。
2. 野宿が出来なくなってしまう。秋頃から公園で野宿は警官の注意を受けるらしい。夜は零下になるので、自殺行為にもなる。
3. 夕食のサラミや缶詰が寒さで油が分離してしまい固まってしまう。

4 . 人や日本が恋しくなってしまう。そのため旅行に対するモチベーションが極端に低下してしまう。

5 . ヨーロッパの全体に秋から冬は、どんよりした重たい雰囲気のお天気がずっと続く。

そんな重い気持ちの中、ミュンヘンからバスに乗り「ダッハウ」という町に到着。

ここは第2次世界大戦の時、1933年ドイツで一番最初に出来た強制収容所であり、この施設を基準に、かの有名なアウシュビッツ強制収容所等が造られた。ユダヤ人を大量虐殺したガス室等の施設が当時のまま残っている。

中国の南京で見た南京大虐殺の記念館も生々しい当時の記録写真が展示してあり、戦争の悲惨さを感じられたが、あそこは少し誇大な表現が多く、中国特有のやらせ感があったが、今回のダッハウは心の奥にまで突き刺さる感じの衝撃を受けた。歴史に残るアウシュビッツはきっと、もっとすごいだろう。

9 1 日目：寒さをしのぐ為、ミュンヘンより夜行にて南下。朝、ミラノに到着した。

この旅2度目のイタリア入国になる。

イタリアは物価は安いし、暖かいし、人がラテン的で適度な感じがとても心地良い。

駅のカフェで朝食を済ませた後、まずミラノの中心にある巨大な芸術「ドウモ」(教会)へ行ってみることにした。駅から町を歩いていると、前回のイタリアとはどこか違和感を感じられる。ミラノは他のイタリアの町とは違いビジネスマンが多く、町の人達がテキパキとし、格好や雰囲気も小奇麗でおしゃれである為、貧乏旅行者にとっては気後れし、場違い感を感じてしまう。場違いといえば、このあと訪れたモナコやコートダジュールではもっと強烈な場違い感を感じた。訪問した半日は見るものすべてがお洒落で、感動の連続だったが、時間が経つにつれ、寂しさと恥ずかしさが増幅し、自分の居場所のない気持ちに変わっていくのが手に取るようにわかった。一人旅行での教訓その1、お洒落な町は極力近づかないこと！

9 7 日目：スイスとフランスの国境の街「シャモニー」に来て、今日で4日目。有名なモンブランに登りたく(ケーブルで8合目まで行ける)待機をしているが、連日の雨で登ることができない。これ以上はユーレールパス(周遊券)が勿体ないので、明日の天気次第で決断することにする。

9 8 日目：やはり今日も朝から雨。モンブラン登山を諦め、お昼の列車で泣く泣く南仏へ向かうことにした。

1 0 0 日目：マルセイユから夜行列車でバルセロナに向かう。

深夜、フランスとスペインの国境で突然、起こされた。フランスとスペインでは列車のレールの幅が違らしく、列車を乗り換えることになった。

マルセイユを出た頃から感じていたのだが、今まで周ってきたヨーロッパ諸国と違い、南仏から

スペインにかけて、何故だか直感的に、身の危険を感じる雰囲気は漂っている。

ユースホステルや安宿で仕入れた、バックパッカー仲間の情報では、ここ数年、イタリアよりスペインの方が数段、治安が悪いから気をつけろと言われた。そのせいで、神経が過敏になっているのか、しかし、フランスに比べ、明らかに乗客の雰囲気が違ってきている。ちょっと怖さを感じるくらいだ。

今までの旅行で「辛い」思いは数え切れないくらい沢山しているが、「怖い」思いをしたことは、意外と少ない。

ちなみにこれまでの海外生活2年半の中で「怖い」出来事ベスト5は、

1. 中国留学の1年目、南方にある雲南省「昆明」から「西双版纳」へ飛行機で移動する時、ソ連からの払い下げの古い飛行機であったせいか、飛行中にプロペラの片方が停止し落ちそうになったとき。
2. 友人と二人でシルクロードを旅行中、「蘭州」で、食堂で中国人の酔っ払い集団に絡まれ、2人対10人での大乱闘劇となり、相手が中国包丁を振りかざしてきたのを、右腕で受けたが、たまたま、嶺打ちだった為、大事に至らなかった時。
3. モンゴルとソ連の国境でソ連に入国するとき、顔写真と本人が違うとのことで、税関で1時間以上別室に拘留されたとき。
4. 氷祭りを見るため、冬の「ハルピン」を旅行したとき、川が凍っていて地元の子供が氷の上を滑って遊んでいたのも、まねをして滑っていたら、氷が割れ、川に落ちてしまった。何とか自力で這い上がり、ベンチに座って休憩をしていたら、濡れたジーパンがベンチにくっ付いて、固まってしまい動けなくなってしまったとき。
5. 「成都」と「重慶」の間に「大足」という涅槃像が古い街を旅行していた時、町まで戻るバスに乗り遅れ、生まれて初めてヒッチハイクをしたが、全然停まってくれず たまたま停まったトラックの荷台にこっそりしがみついたが、途中で振り落とされ街灯も何も無い真っ暗闇の田舎道を月明かりだけで、約10キロ以上はなれた町まで何とかたどり着いた時。

103日目：朝、バルセロナからマドリードに到着した。

列車から降りようとしたとき、急に車掌に呼び止められた。ちょっと来いという素振りだったので、付いて行くと隣の車両に、睡眠薬を飲まされ、鞆をはじめ、身に着けていた物すべてを盗られ、これぞ「身包みをはがされる」という言葉がぴったりの状況になっている日本人旅行者が寝ていた。まだ、睡眠薬のせいで意識がもうろうとしているため、医務室に連れて行くことになった。1時間ほどして、まともに話せるようになったので、事情を聞くと隣に座った人から未開封のジュースを貰い、それを飲んだ後、急激に睡魔に襲われたそうだ。

パスポートを盗られてしまったので、早速、日本大使館を探して訪ねてみると、沢山の日本人の方が、似たような被害に遭い、大使館の窓口に並んでいた。

明日はわが身。気をつけて旅行しないと・・・。

105日目：マドリードから列車で2時間ほどのところに「セコビア」という昔ながらの古い町がある。小高い丘の上に街ができていて、周りは川と一面に広がる農地のため、映画や絵画で見ると中世の街がそのまま残っているような錯覚をおぼえる。

街の所々にはローマ時代の水道橋が今もそのままの状態に残っている。本当にタイムスリップしたような感じである。

丘の上には中世のお城が建っている。地元の人と言うには、このお城がディズニーランドのシンデレラ城のモデルになった城であると力強く言っていた。

ドイツの「フッセン」にあるノイシュバンシュタイン城がモデルとしては有名であるが、両方見るとセコビアのお城のほうがそれらしい雰囲気があるのではないかと思われる。

「トレド」、「セコビア」といった大都市近郊にあり、ひっそりたたずむ中世の街を訪れるのはスペイン旅行の醍醐味である。

次はドンキホーテの風車を見に行こう！

今回の世界旅行記パート3はここまで。続きは次回の卓話にて。次回はアフリカ、中近東です。